早稲田大学ドイツ語学・文学会
第10回研究発表会研究発表要旨

新しい音楽を求めて—ベートーヴェンの『第9』交響曲受容史の一側面

佐藤　英

19世紀のドイツ音楽の方向性を規定した人物は，言うまでもなく，ベートーヴェンである。その中でも特に重要なのは，交響曲第9番である。1824年に初演されたこの作品は，後期のベートーヴェン作品の難解さと相まって，初演後しばらくは理解しがたいものの極致とまで言われた。しかし，これに理解を示し，この巨大な表現を克服してこそ新しい音楽の可能性が開かれると考えた作曲家が現れた。シューマンとワーグナーである。

交響曲を音楽ジャンルにおける崇高な形式と捉えるシューマンにとって，ベートーヴェンは常に絶対的な存在である。この絶対者ベートーヴェン像は，特に交響曲を作曲する際に，シューマンに強い影響を及ぼした。従来の形式を温存しながらも，ベートーヴェンとは違う，何か新しい表現の可能性が交響曲に残されていることを確認したいシューマンとしては，他の作曲家がなんらかの端緒を示してくれることを望む。シューマンが，もっとも親近感を抱いていたシューベルトの「グレート」交響曲のなかに，そうした可能性を見出したとき，彼は自分の歩むべき道を悟ったのである。一方，ワーグナーは，交響曲でベートーヴェンとの直接対決をおこなったシューマンの場合とは異なり，彼にとっての音楽の理想像「第9」に匹敵する作品を作り出すためには，交響曲というジャンルを捨てなければならないと考えた。ワーグナーは，ピアノ・ソナタや交響曲の作曲を通じて，ベートーヴェンによって絶対的な規範が形成されたこのジャンルにおいては，すべてがベートーヴェンの亜流となってしまうように感じたのである。そのとき彼が着目したのは，未だ真の規範が存在しない歌劇だったのである。

交響曲と歌劇において新たな規範を追求した彼らの試みは，交響曲においてはベートーヴェン流の構築を重んじる厳格な作風を，歌劇においてはライトモティーフによって体系的に作品を作り上げる作曲法を作り出した。その上，交響曲の場合，シューマンの問題意識にもその一端が現れていたように，このジャンルで「規範」を示したと考えられたベートーヴェンの神格化が年を追うごとに進み，極端な逸脱を許さない雰囲気が形成された。19世紀後半に，外圧としてベートーヴェンを意識しなければならなかった作曲家のひとりがブラームスである。一方，歌劇の場合，ワーグナーが楽曲を構築する原理を提示し，かつ「総合芸術」として作曲家が歌劇の諸要素をすべて統括するスタイルを打ち出したことで，多くのワーグナー追従者たちを生み出した。こうした交響曲と歌劇の事情を考えると，この二つのジャンルで同時に歴史的な動きがあった1876年は，きわめて重要である。つまり，この年は，バイロイト祝祭劇場の開場によってワーグナーの絶対性が社会に大々的に示された年であると同時に，ベートーヴェンの「第10交響曲」と評されたブラームスの交響曲第1番の初演によって，ベートーヴェン以後としてしか語り得なくなったドイツの交響曲事情を象徴する作品が登場した年でもあったのである。